

早まるアメリカの大学合否通知

—— 『高等教育クロニクル』の記事より ——

宮 田 実 (訳)

“Colleges Offer Applicants New Ways to Get Early Answers”

—— An Article from *The Chronicle of Higher Education* ——

Translated by MIYATA Minoru

変わる伝統的スケジュール

アメリカでは大学志願者は大学からの合否通知を受け取るまで長くて不安な日々を過ごすことになる。毎年多くの高校生は冬に入学願書一式を提出し、春までその結果を待つことになる。合否判定にこのような長い時間が本当に必要なのだろうか。

長年にわたって大学の入学事務局 (The Office of Admissions) の職員たちは伝統的なスケジュール、即ち、1月1日までに願書を締め切り、4月1日までに合否を決定するというスケジュールに疑問を感じていた。ディポール大学で学生募集を担当しているベッケンステッド氏は「普通の大学で合否を判定するのにそんなに時間がかかるのでしょうか。いいえ、そんなにかかりません。でも、昔からそのようなスケジュールでやってきましたから。」と述べる。このスケジュールが始まった頃は少数の難関校が大量の申請書類を基に志願者を慎重に審査していたので合否判定が時間のかかる作業だったのである。このような伝統的な合否判定作業スケジュールが基本的には今も続いているのである。

しかし、学生募集がより複雑になり大学間の競争が厳しくなるにつれて大学の中には合否判定のプロセスを速めて早期に合否判定を通知するところが出てきた。この制度はうまくいっているようだが問題点もある。というのは、もし合格すれば必ずその大学に入学手続きをしなければならないという条件がついているのである。しかし、この制度によって

平成22年3月18日 原稿受理
大阪産業大学 教養部

合否判定作業がこれまでより速くできるということが明らかになったのである。最近では従来のスケジュールより早く願書を受け付けて、しかも入学手続を条件としないで早く合格通知を出す大学がある。中には複数の早期願書受付締切日を設定して高校生が最上級生になる直前の夏に願書を提出させる大学もある。

しかし、高校の進学カウンセラーの中には、このような方策は高校生よりも大学にとって都合がいいのであると指摘する者がいる。彼らはこのような方策は大学が早く新入生を確保するための手段であり、不安な高校生に決断を急がせるのではないかと心配する。一方、入学事務局の幹部たちは早期願書受付によって大学と志願者が互いにコミュニケーションをとる時間が増えるという利点を指摘する。

ヴァーモント大学入学事務局長のワイザー氏は「多くの志願者は早期願書受付を歓迎しています。」と述べる。同大学では従来のスケジュールを前倒して冬に合否通知を送付している。これはVIP出願制度と呼ばれるもので、学業成績の良い州外の高校生に11月1日までに願書を提出させる。この場合、志願者は出願料が免除され、12月末日までに合否通知を受け取ることができる。更にこの制度の志願者は通常の志願者と同じ日程で入学するか否かを決めればよいのである。ヴァーモント大学に昨秋入学した新入生2,600人のうち、625人がVIP出願制度で入学した。ワイザー氏はこの制度によって本来志願しなかったであろう高校生が志願したと分析する。氏は更に「学生は早い時期に合格を得ることによって心の余裕を持って入学したい大学を決めることができます。」と述べる。

クリスマスプレゼント

オレゴン州にある私立のリベラルアーツ大学であるウィラメット大学は昨年願が見込まれる高校生を対象に特別早期出願制度を始めた。入学事務局で奨学金を担当するライニア氏によれば、その目的は合格した学生、特に奨学金を必要とする学生の相談に時間をかけて応じることであった。同大学はすでに一般早期出願制度を実施しており、応募締切日は12月1日で、合否通知も比較的早く送付している。しかし、昨年は願が見込める高校生に、応募締切日は同じ12月1日であるが、わずか3週間後に合否通知を送付するという条件で特別早期出願制度の願書を送った。一昨年は昨年より小規模でこの制度を実施したが、この制度で入学した今の1年生の多くはこの選択肢があって良かったと言っている。

ウィラメット大学では昨年、特別早期出願制度の願書を送付する対象学生を選ぶに当たって様々な基準を採用した。例えば、SAT(大学進学標準テスト)の得点、高校の学業成績、面接をしたかどうか、同大学に通う兄弟姉妹がいるかどうか等である。対象学生には氏名、住所、高校名が記入済みの願書が送付された。大学に登録されている24,000名の

学生の約半数に特別早期出願制度の願書を送付した結果約2,000名が志願し、選考の結果約1,200名が合格した。

ウィラメット大学では多数の願書を迅速に審査するために作業日程を変更した。入学事務局の職員は志願者募集のための高校訪問の期間を短縮し、9月と10月に集中させた。そして11月を願書を審査したりキャンパスを訪れる学生と面談する期間とした。その結果、彼らは特別早期出願制度と一般早期出願制度の志願者を同時期に審査することになった。

ペンシルヴァニア州にあるアリゲニー大学はいくつかの独自の早期志願制度を実施している。1つは、入学を条件とする早期出願制度であるが、この制度で入学するのは全体の約15%にすぎない。更に同大学は特別早期出願制度の願書を大学に登録されている約20,000名の高校生に送付している。これらの願書は主としてマイノリティ学生および特別な地域の学生に送付される。入学事務局のフリードホフ副局長によれば、これら2つの制度とは別に通常の志願者の中で特に優秀な志願者に対してクリスマス前に合格通知を送付している。アリゲニー大学では他の大学同様、学業成績が良く大学に最適の人材と思われる志願者を特定することができる。そのような志願者を待たせる必要はないのではないかと考えたのである。

アリゲニー大学では伝統的なスケジュールによる合格者のうち25%に対し早期に合格通知を送付している。フリードホフ氏は「12月に合格通知を受け取るのはクリスマスプレゼントのようなものです。早期志願制度は実施する大学が増えたので目新しさがなくなってきました。」と述べる。

入学を条件とした早期出願制度は入学者数を調整するのに役に立つが、伝統的なスケジュールによって志願した学生に早期に合否通知を出してもメリットがないように思われる。しかし、入学事務局のスタッフはそれらの合格者とコミュニケーションを図る時間を持つことができるのである。その結果、合格者はアリゲニー大学の学生としての自分を想像する時間を持つことができ、入学する可能性が高まることになる。

早期出願競争

インディアナ州にあるヴァルパライソ大学入学事務局長のフェヴィグ氏も昨年同じようなことを考えた。彼は、もし高校最上級生（一般的には4年生）になる直前の生徒に入学願書を提出させたらどうだろうと考えた。昨年の夏、入学事務局はキャンパスを訪れたことのある250人の新4年生予定者に書類を送付した。大学は9月1日までに願書を提出すれば約1ヵ月後に合否通知を送付することを約束した。その結果、9月1日までに20人が出願した。そして12月末現在、合計138人が出願し、123人が合格した。これらの合格者は通

常のスケジュールによる志願者と同じように5月1日までに入学するかどうかの最終決定をすればよいことになっている。

この方策が今年と同大学の最終的な志願者数にどのような効果をもたらすかはまだわからないが、フェヴィグ氏は今後夏の志願者は増加するだろうと予測し、「一般的に早期に志願する生徒は入学手続き率が良いので、そのような生徒に少しでも長い期間入学を検討してもらうのは良いことです。」と述べる。早期出願制度の欠点は、まだ心の準備ができていない生徒にはストレスになるということである。しかし、フェヴィグ氏は入学を条件としない早期出願制度は大学選びのプレッシャーを軽減すると考える。合格した生徒に対して大学は詳しい資料を送り、教授陣を紹介し、大学を訪問するよう促す。フェヴィグ氏は次のように述べる。「われわれは合格者に対してプレッシャーをかけているわけではないのです。うちに来る学生は優秀な学生ばかりではありません。いろんな可能性を持ったまじめな学生が欲しいんです。そして、我が大学を理解してもらうために時間をかければかけるほど長い目で見ればお互いに良い結果が得られると思います。」

メリーランド州にあるマクダニエル大学は昨年願書受付スケジュールを変更した。このリベラルアーツカレッジはこれまでも12月1日締切の早期出願制度を実施していたが、昨年はそれに加えて10月15日と11月15日にも締切日を設定した。合否は約3週間後に通知された。同大学入学事務局のハインズ氏は「不況の時期は志願者の家族は早期の合否と奨学金に関する情報を知りたいのです。」と述べる。この試みは大学と志願者双方にとって良い結果を生み出した。1回目の締め切りに約100名が、2回目に700名、3回目に900名が出願した。その内、大学は約1,000名を合格させた。10月15日締切の出願者が少なかったことは十分予測できたことである。この日を設定したのには2つの理由があった。1つは、11月または12月初めに締切る他大学の早期志願制度を利用しようとする生徒を取り込むこと。もう1つは、早すぎるとはいつからなのかという問いに答えることであった。

カウンセラーの不安

ミシガン州にある英才教育校ローパースクールで大学進学カウンセラーをしているオコーナー氏は、入学を条件としない大学早期出願制度が広がっていること、また、大学が早期に合格通知を出していることに懸念を抱いている。氏は「早期出願制度は新製品をしつこく売り込む自動車ディーラーを連想させます。審査期間が短くなることによって審査がよい加減なものになるのではないかと心配しています。」と述べる。

よく知らない大学から出願書類を受け取った生徒がオコーナー氏を訪ねてその大学についての情報を求めてくることがある。しかし、たいいていの場合、その大学が自分に向けて

いるかどうか十分に考えないで大学の宣伝文句に惹かれ願書を出してしまうようだ。

早期出願制度が広まると大学進学カウンセラーにとって好ましくないことが起こる。カウンセリングの期間が短くなり、進学相談が最も多い秋にじっくりと生徒と話し合うことができなくなる。オコーナー氏は次のように述べる。「このようなことが起こるのは大学も高校生も早く安心したいからなのです。大学は早く新入生を確保したいのです。高校生は卒業後の秋にどこか入れる大学を早く確保したいのです。問題は両者のバランスを如何に取るかということなんです。」

ドレクセル大学の戦略

ペンシルヴァニア州フィラデルフィア市にあるドレクセル大学には毎日大量の入学願書が届く。更に、高校の成績証明書、SAT等の得点、推薦状が入学事務局に届く。事務局内では8人の職員が開封し、分類し、ページ毎にスキャナーで読み取る。その近くで24人の職員がコンピュータに向かって志願者の情報をデジタルファイル化している。閲覧ブースではデジタルファイルを丹念に読むという単調だが厳しい作業が続く。この作業は午前8時から午後11時まで2交替で行われる。忙しい時には1人の職員が1時間に500件の書類に目を通すこともある。

ドレクセル大学の入学事務局は以前はこんなに忙しくなかった。10年前は世間の注目度は低く志願者も少なかった。しかし、その後2012年までに学部生の数を3割強増やし、同時に学力水準を引き上げ、人種の多様性を維持するという戦略が立てられた。これまでのところこの戦略は順調に進んでいる。

今や入学事務局は大きな部署となり積極的に学生獲得活動を行っている。その中心的な役割を果たしているのがドレクセルVIP出願制度である。この制度では大学は、大学が選んだ重要な生徒だけでなく大学が情報を持つすべての生徒に大学案内の資料を送るのである。

このような戦略は現在高等教育の世界で起こっているいくつかの現実を物語っている。例えば、従来の大学出願スケジュールが変化したこと、大学の成長と大学の生き残りが同義語になったこと、多くの大学が優秀な生徒を確保するために様々な独創的な方策を打ち出していること等が挙げられる。更に、審査のスピード化と簡略化を目的としてスタートしたドレクセルVIP出願制度は大学出願を如何にやすくするかという重要な問題を提起している。入学事務局のマクドナルド副局長はその問いに対して「少なくともドレクセル大学のような大学では十分可能です。」と述べる。ドレクセル大学ではここ数年志願者が急増した。2006年の志願者数は19,000名であったが、2008年は31,000名に増加した。マク

ドナルド氏は「志願者数増加の大きな要因は3年前から始めたVIP出願制度にあります。大学にとって志願者はエネルギー源です。これが多ければ多いほど学生数、学生の質、奨学金の額などをより理想的なものにできるのです。」と述べる。

ドレクセル大学の新制度の概要は以下の通りである。大学は毎年SAT等全国共通の学力テストで、ある一定の水準に達した数十万人の高校生の情報を購入する。それらすべての高校生に大学紹介の手紙を送り、ドレクセル大学についてもっと知りたいかどうか尋ねる。それに対してイエスと答えた高校生の情報が集められる。その中には大学に直接問い合わせをした高校生も含まれる。それらの高校生に大学から追加資料が送られる。そして、9月に彼らが高校の最上級生になった時にVIP出願書類が送られる。ドレクセル版の早期出願書類には高校生の住所、氏名がすでに入力されている。第1ページには、「今すぐ出願を！」とあり、3つの特典、即ち、迅速な奨学金の提示、オンライン出願の場合と同様の出願料(75ドル)の免除、一般的に求められる長文のエッセイではなく短いエッセイでよいことが記載されている。

志願者は12月1日までに願書を送るかオンラインで出願することを強く求められる。願書が届くと大学は志願者に対してすぐに他の必要書類(高校の成績証明書、SATの得点、推薦状、エッセイ)を送るよう要請する。すべての書類が揃ったら入学事務局はそれらを精査する。ドレクセル大学では書類が届いた順に次々と審査していき、評価期間は約3週間である。これまでのところこのVIP出願制度はうまくいっている。2008年ドレクセル大学は175,000名にVIP出願書類を送り約31,000名が出願した。合格率は約68%で、入学者数は約2,400名であった。

ドレクセル大学への志願者増の背景にはVIP出願制度などの学生獲得戦略以外の要素もある。例えば、健全な財政状況、新校舎の建設、医学部の新設、専攻分野の増加などが挙げられる。また、経済状況が厳しい今日、単位が取得できしかも給料が支払われるインターンシッププログラムは特に魅力的なプログラムである。それでもVIP出願制度が志願者増に貢献したことは間違いない。2008年の全志願者の内、約半数がVIP出願制度を利用した。また、VIP出願制度はペンシルヴァニア州外からの志願者増に貢献した。マクドナルド氏によれば、VIP出願制度は志願者の共感を得たようだ。志願者と大学がお互い求めているものが合致したということである。

ドレクセル大学のVIP出願制度については批判もある。ボストン郊外にあるウィンチェンダースクールで大学進学カウンセリングを担当しているウォード氏は「ドレクセル大学の早期出願制度は強力な学生獲得戦略です。しかし、早すぎる出願は生徒に過度の不安を与えます」と述べる。

しかし、ドレクセル大学で学生募集を担当するターナー氏はVIP出願制度は高校生にとっても大学にとっても利点があると考え。合格した志願者の多くが氏名や住所が印字された申請書類はとても印象的で自分が大学に必要とされていると感じると言う。ターナー氏は「出願するかしないかは別として申請書類に記入することによってドレクセル大学に対して関心を持ってもらえればいいのです。」と述べる。

多くの大学が同じような方策を採用すれば、このような出願制度の効力は無くなるかもしれない。それに対してドレクセル大学の入学事務局の職員は「もしそうなればまた次の効果的な戦略を考え出さなければなりません。」と述べる。

(2010年1月15日号)

(Copyright 2010. *The Chronicle of Higher Education*. Translated and reprinted with permission.)

訳者あとがき

本稿はアメリカで発行されている高等教育に関する週刊専門新聞『高等教育クロニクル』に掲載された記事の翻訳である。筆者はエリック・フーヴァー氏とベッキー・スピアノ氏である。

今回取り上げたのはアメリカの大学における学生選抜方法である。アメリカでは日本のように個々の大学が入学試験をすることはない。アメリカでは入学事務局という専門の部署があり、その専門職員が書類審査による合否判定を行う。合否判定の資料としては高校の学業成績と席次、全国共通学力テスト (SATやACT) の成績、特技、エッセイ、推薦状等がある。その中で特に重要視されるのは学力に関する資料である。

入学事務局には学生選抜の他にもいくつかの重要な役割がある。その内最も重要なのが学生の勧誘である。アメリカではある大学に関心を持つ高校生はその大学の入学事務局に登録することができる。このような登録制度によって入学事務局は潜在的な志願者のリストを持つことができる。そのようなリストに基づいて大学は様々なアプローチをすることになる。電子メールやパンフレットを送ったり、特に優秀な生徒の獲得のためには直接本人に電話をかけることもある。オープンキャンパス(アメリカではOpen Houseと呼ばれる)は「キャンパスツアー」という名称で毎日実施している大学もある。誰でも自由に参加できるこのツアーは、毎日定時に行われ、入学事務局の職員が30分程度大学の概略を説明した後、訓練を受けた学生ガイドがキャンパス内を案内してくれる。学生選抜に関する詳しい情報はいつでも入学事務局に予約すればその職員との面談を通して入手することがで

きる。

アメリカではほとんどの学生は秋学期の始まる9月に入学する。そのための入学選考は日本の大学よりもかなり早い時期に行われる。通常は冬に出願して春に合否通知が送られるのだが、本稿にあるように早期出願制度が広まっている。高校生が最上級生になる前に出願するなど日本の大学では考えられないことである。今後このような早期出願制度はますますエスカレートすることが予想される。

日本では、特に私立大学においては夏以降、多種多様な推薦入試を皮切りとして長期にわたって入試が続く。日本でもアメリカのように年7回実施され、しかも何度受験してもいいSATのような全国共通学力テストが実施されれば、そのスコアを他の出願書類と共に提出させることによって学力審査が容易にできる。そうなれば各大学が毎年膨大な時間とエネルギーを費やしている入試問題作成が不要となる。このような入試がいつの日か実現することを期待したい。